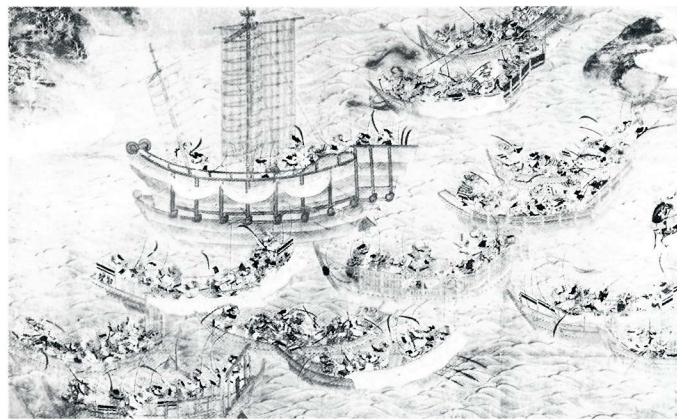


赤間神宮略記

Brief History



- 一、国指定重要文化財
平家物語 二十冊（長門本平家物語）
- 一、国指定重要文化財
赤間神宮文書 全十卷一冊
- 一、県指定有形文化財
安徳天皇縁起絵図八幅（土佐光信筆）
- 一、重要美術品
平家一門肖像画十幅
- 一、重要美術品
源平合戦絵屏風（土佐光起）
- 一、重要美術品
源平合戦図絵十幅（海北友松）
- 一、重要美術品
源平合戦絵屏風（狩野元信）
- 一、重要美術品
能登守平教経の太刀（伝備前友成）
- 一、其の他
太閤秀吉寄進の狛犬及木盃をはじめ多数所蔵



平家物語の流布本



赤間神宮

〒750-0003 下関市阿弥陀寺町 電話(083)231-4138代
Amidaijicho Shimonoseki TEL(083)231-4138
<http://www.tiki.ne.jp/~akama-jingu/>



御祭神

安徳天皇
(第八十二代)

御祭祀

八咫鏡
(安徳天皇神鏡)

御由緒

今を去る八〇〇年の昔、源平最後の合戦に安徳天皇は御歳僅か八才をもって平家一門と共に壇之浦に崩じ給うや、赤間関紅石山麓阿弥陀寺境内に奉葬し、建久二年、朝廷は長門国に勅して御陵上に御影堂を建立せしめ給ひ、建礼門院御乳母の女、少将の局命阿尼をして奉侍の上、勅願寺として永く天皇の御冥福を祈らしめ給う、朝廷の尊崇きわめて篤く文人墨客の参拝亦枚挙にいとまなし

明治維新に至るや阿弥陀寺を廢し、御影堂を改めて天皇社と称せられ、明治八年十月七日勅命をもって官幣中社に列し、地名に依り社号を赤間宮と定め給ひ、社殿を造宮せしめらる。昭和十五年八月一日天皇陛下には勅使を差し遣わされ官幣大社に御列格宮号を改めて赤間神宮と宣下あらせられ、社殿又改造し輪奐の美整いしが、惜しむべし大東亜大戦の空襲を蒙り、神殿以下悉く焼失加ふるに未曾有の敗戦に依り、復興造宮は至難を極めしも、本殿祝詞殿以下御復興に邁進、苦節苦闘二十年にして完工、昭和四十年四月御祭神七八〇年大祭を迎え関門の風光に和する社殿の壮麗は昔日に倍し実に陸の龍宮と称えらるるに至れり

赤間神宮年中行事表

- | | |
|------------------|-------------------|
| 一月 一日 歳旦祭・初詣 | 六月 三十日 大祓式 |
| 二月 舞楽始めの儀 | 七月 十五日 耳なし芳一琵琶供養祭 |
| 三日 元始祭 | 八月 二十九日 鎮守八幡宮夏越祭 |
| 二月 節分祭(鎮守八幡宮) | 八月 十五日 靖国神社遥拝式 |
| 十一日 建国記念の日奉祝祭 | 九月 (上旬) 紅石稻荷神社秋祭 |
| 十四日 真木菊四郎祭 | 九月 (上旬) 紅石稻荷神社秋祭 |
| 十七日 祈年祭 | 十月 一日 大連神社秋祭 |
| 三月 (上旬) 紅石稻荷神社春祭 | 十月 (上旬) 仲秋観月祭 |
| 平家雛流神事 | 七月 秋季例大祭・関門海峡祭 |
| 十一月 春季皇霊祭遥拝式 | 十五日 鎮守八幡宮秋季大祭 |
| 四月二十四日 献茶式 | (中旬) うに供養祭 |
| 五月 二日 先帝祭御陵前祭 | 十一月 (上旬) 菊花祭 |
| 三日 先帝祭上臈参拝 | 十五日 七五三詣 |
| 四日 先帝祭御神幸祭 | 十二月 新嘗祭 |
| 十日 大連神社春祭 | 十二月 十日 しめなわ祭 |
| | 十二月 十日 天皇御誕生日奉祝祭 |
| | 十二月 二十八日 餅つき神事 |
| | 十二月 三十一日 大祓式・除夜祭 |

水天門の由来



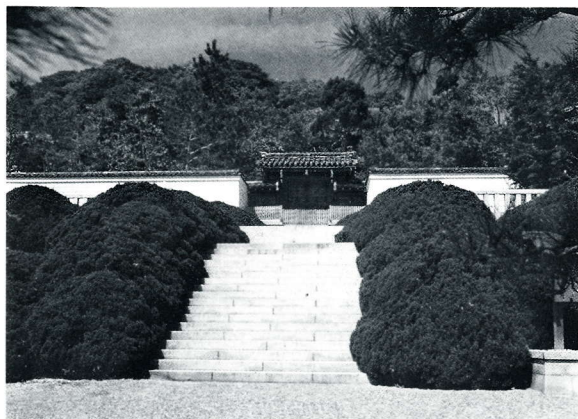
御祭神安徳天皇は水天皇大神と称へ奉り、徳富蘇峯翁は之が奉建に際して「玉体を水底に鎮め給ひしも、御霊は天上にお在しませば、此の神門を「水天門」と申し奉る所以なり」とせらる。蓋しその結構壯麗雄大にして古今無比、他に類例なく將に天下第一の観たり

壽永四年三月二十四日壇之浦合戦に平二位の尼前は「今ぞしるもすそ川の おんながれ 波の下にも 都ありとは」と詠じ給ひ、此の事を深く思召されし昭憲皇太后宮は明治九年に「いまも猶袖こそぬるれ わたつみの 龍のみやこのみゆき思へば」との御歌を奉獻あらせ給へり、此の御ゆかりを、かしこみ奉りて、昭和三十三年、世界唯一の竜宮造りにぞ御造宮成るや、同年四月七日、昭和天皇皇后両陛下には親しく神宮に御参拝、御通り初めの栄を賜ひ、あまつさえ御製一首をも下し給へり、即ち「みなそこに しづみ給ひし 遠つ祖を 悲しとぞ思ふ 書見るたびに」



毎年、五月二日の御祭神安徳天皇御命日を皮切りとして以後三日間に亘り行われる。
 『関の先帝、小倉の祇園 雨が降らねば金が降る (風が吹く)』と古くから俗語にもある如く祭礼日は数十萬の人出で賑わい、下関市の繁栄は往古以來この先帝祭に在ると言われる。其の由来するところ壇之浦に平家滅亡の際、中島四郎大夫正則(伊崎町、中島家の祖)と言へる武士郎党を率いて赤間関西端玉城山に籠り、再興を謀りしも機運遂に至らず、漁業を営むに至れり。やがて例年先帝祭御命日には威儀を正して参拝を続け、今日に至りぬ。また多数の女官達、赤間関在任の有志にたすけられ、山野の花を手折りは港に泊る船人に売り生計を立つる中に同じく先帝御命日に至るや年毎に闕伽を汲み、香花を手向け威儀を正して礼拝を続け。即ち上臈参拝の源なり。
 爾来連綿として廃絶なく今日さらに殷賑を極め、官女に警固、稚児が従い、上臈に禿の随う美しい列立は遠く平安の昔、宮中に行われし五節舞姫の形に倣い、絢爛豪華なる外八文字道中は実に天下の壯観にして観者の固唾を吞ましめ將に西日本唯一の行事と称えらる。(無形文化財指定)

安徳天皇阿弥陀寺陵

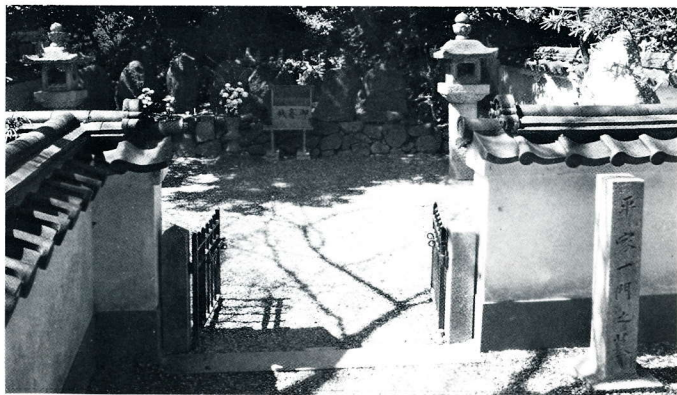


幼なくしてなくなつた安徳天皇のお墓である。赤間神宮の隣にあり、西日本ではただひとつの御陵である。

平家一門の墓

壇の浦合戦に亡びし平家一門の武將を祀るもので七盛塚とも呼ばれ 耳無し芳一の伝説地としても殊に有名である。

左近衛少将	左近衛中将	右近衛中将	副将能登守	参議修理大夫	大將中納言	参議中納言	伊賀平内左衛門	上総五郎兵衛	飛驒三郎左衛門	飛驒四郎兵衛	越中次郎兵衛	丹後守侍從	從一位	從二位
前	將	將	守	夫	言	言	後							
平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平
有盛	清盛	資盛	教盛	經盛	知盛	教盛	家長	忠光	景經	景俊	盛繼	忠房	時子	時子



一 芳 なし 耳

赤間ヶ関の阿弥陀寺（今の赤間神宮）に芳一という名の盲人が住んでいました。琵琶法師としてあまりにも有名で、「妙技入神」と称えられていました。壇ノ浦の戦いで敗れて海に沈んだ平家の人々の亡霊も、是非この芳一の琵琶を聴きたいと或る夜ひそかにその姿を現わしました。芳一は、呼ばれるまま誘われるままに手をひかれて行きますと、七曲り八曲りの廊下を辿り大広間に通されました。大勢の人達が威儀を正して座つて居るらしく、正面の御簾の中からは、『御苦勞であつた。壇ノ浦の合戦の物語を弹奏せよ』と声が掛かりました。芳一が弹奏を始めると居並ぶ人々は涙を流し、夫人たちは嗚咽の声を抑えきれずにいる様子です。芳一は自分の琵琶に陶酔しつつ、琵琶を弾じ終えました。『今日は実に満足した。又明日も明後日も、七日七夜の間は必ず弾じてくれ』と頼まれ、手をひかれて寺へ帰りました。



こうして、毎夜外出することが続くので寺の僧たちの気の付く所となり『どうも不思議だ、盲目の芳一が毎夜琵琶を抱えて出て行くが、一体何処へ行くのであるう』と、張り込みをして時の来るのを待ち、襖の蔭からじつと息をひそめて見ていますと、誰もいないのに一言二言ものを云つたかと思うと、ついと出て行きました。僧たちがすぐに後を付けましたが、その姿を見失つてしまい、やむなく寺に引き返して参りますと、近くの森の中で琵琶の音がけたたましく聞こえる

ではありませんか。『アレ、あんな所に芳一が』と、大急ぎで草を分けて駆け寄りますと、また驚きました。芳一が暗闇の中で、立ち並ぶ墓石の前に端座し、此の世の人とも思えぬ形相で懸命に琵琶を弾じていて、まわりには鬼火が揺れ、その凄惨なことはとても正視出来ません。僧たちは身の毛もよだつ思いがしました。恐る恐る近寄って呼び起こし、皆で抱えて阿弥陀寺へ連れて帰りました。

事の一部分始終を聞くと、和尚は大層驚いて『これは、平家の亡霊がお前の入神の弹奏を聞くためにあの世へ連れて行こうとしているのだ。今宵は誰が来ても声を出さず、動かず、返事もするな。』と固く申し渡し、芳一を裸にして身体中へ般若心経を書き込み、『さあ、これでお前は安全だ』と云い置いて、法事に行つてしまわれました。

その夜のこと、芳一が端座していると、生ぬるい風と共に誰かがやって来た気がしました。その足音がピタリと止まり、「ハテ」と思う内に『芳一』と呼びかけられました。危うく返事をしかけましたが、和尚さんの言葉を思い出し口をつぐんでいると、又も『芳一』と呼びかけられました。しかし、今度も返事をしませんでした。声は、『今宵は声もせず、姿も見えぬがハテ如何した事であるう。ああ、ここに耳だけが。せめて是れなりと持つて帰ろう』とつぶやくと、氷の様な冷たい手が芳一の耳をつまんで、グイともぎ取り、いずれともなく立ち去りました。

さて、和尚さん、『今日こそ芳一も無事であつたらう』と寺に帰ってきましたが、襖を開けて『アッ』と叫んだまましばらく呆然と立ちすくみました。芳一は血だらけで、両方の耳が無かつたからです。

和尚さんは、芳一の全身に経文を書きながら耳だけ書き忘れたことをなげき悲しみました。しかし、命拾いをしたことに皆が喜び、阿弥陀寺全山、法要を営み、平家一門の亡霊を弔いました。これ以後、芳一を「耳なし芳一」と呼ぶようになったということです。